きらいの花

鹿児島県立奄美高等学校　二年　福原　莉巴

モンシロチョウのチロルは、綺麗なものを探して旅をしています。

「今日は、空がとても綺麗だ。この間見た、海みたいだ。」

チロルは、綺麗なものを見るたびに、「こんなに綺麗なものがあるんだ。もっとたくさんの綺麗なものがあるに違いない。」と思いました。青く輝く海を思い出して、チロルは空を泳ぐように飛びました。

チロルはその日、訪れた町で、色とりどりの花が咲く花壇を見つけました。花壇には、女の子がひとり腰かけていました。女の子の足下の真新しいランドセルが、花壇にもたれています。チロルが、花の影に隠れて女の子の様子をうかがっていると，女の子は、花壇から花を一輪折って、「すき、きらい。すき、きらい。」と言いながら、花びらを一枚ずつちぎっていきました。花びらをむしられる花の姿に、チロルは胸が痛みました。すると「すき。」とつぶやいて、また花びらをちぎった女の子は、手元の花に残る一枚の花びらを見て、手をとめました。女の子はとても悲しそうな顔をして、その花を花壇のふちに置くと、ランドセルを背負ってどこかへ行ってしまいました。

女の子が去った後、チロルはひとひらだけ花びらの残された花に話しかけます。

「あの……大丈夫？」

花は、

「ええ。」

と答えました。

「本当に？だって、せっかくの綺麗な花びらが……」

「私の花びらよりも、あなたのその羽の方が綺麗よ。」

チロルは、花の言葉に驚きました。なぜなら、チロルが今までに出会った花は、自分の美しさを自慢するばかりだったからです。チロルは、この花の心の綺麗さに惹かれました。

「さっきの女の子は何をしていたの。」

チロルが聞くと、

「花占い、と言うのよ。花びらをちぎって、好きな人が自分のことをどう思っているかを占うの。」

と花が答えました。

チロルは納得してうなずき、花の一枚だけ残った花びらを見つめました。

「私はね。」

と花が言いました。

「誰かの役に立てるなら、花びらなんて惜しくないの。

ただ……。」
と花が言います
「私の花びらは、役に立たなかったみたい。」
チロルは、女の子の悲しそうな顔を思い出しました。
「私は、『きらい』の花なの。」
花が、つぶやきました。チロルは、花が何を言おうとしているのか、分かりました。
この残った一枚の花びらは、「きらい」。女の子に、悲しい顔をさせてしまった、「きらい」の花。
チロルは、花を元気付けるため、今まで旅をする中で見た綺麗なものの話をすることにしました。チロルの楽しい話は、夜が更けるまで続きました。旅をしているチロルの話を、まるで実際に旅をしてるかのように楽しんでいた花は、ふとチロルの後ろの暗闇で、何かが光っているのに気がつきました。
それは、二つの目玉でした。ぎらりと光る真ん丸の目玉が、チロルのことをじっと見ているのです。なんだか危ないような気がして、「ねえ、後ろ……。」と花びらが言いかけたその時、パシッ、と音がしたかと思うと、花の目の前に何かがはらりと落ちました。
よく見るとそれは、チロルのちぎれた羽でした。はっとして見上げるとすでにチロルの姿はなく、そこには、花を睨みつける猫がいました。花は、恐ろしさのあまり声も出ません。猫は、フン、と鼻をならすと、ちぎったチロルの羽をくわえて、どこかへ行ってしまいました。
「もう、行った。」
少しして、花壇の奥から出てきたのは、片羽を失った痛々しい姿のチロルでした。
「ああ、なんてこと。」
花は、自分が花びらを失った時の何倍も辛い気持ちで見つめました。
「ごめんなさい。」
と花は言いました。
「どうして君が謝るの。君は悪くないよ。」
チロルの言葉に、花は
「いいえ。」
と言いました。
「私は、友達が傷付けられるのに、何も出来なかった、役立たずな花なの。」
「役立たずなんかじゃないよ。」
とチロルが言いますが、花は
「いいえ。」
と言います。
「ごめんなさい。」と震えた声で、花びらが再びそうつぶやいた時、最後の一枚の花びらが、涙のようにはらりと落ちました。

「あ。」
チロルが、落ちる花びらをとっさに羽で受けとめます。すると、受け止めた花びらは、すうっとちぎれた方の羽になじんで、気が付いた時には、チロルの片羽になっていました。
「見て。」
チロルは、ぱたぱたと羽を動かして見せます。心から嬉しそうに、周りを飛び回るチロルの姿に、花は胸がいっぱいになりました。
「私の花びらが、役に立ったのね。」
花びらのない花と、一匹の蝶は、月明かりに照らされています。
翌朝、チロルと花は日の光に目を覚ましました。花は、花壇を通りすぎる子どもたちの中に、あの花占いをしていた女の子の姿を見つけました。「あ、あの子。」
するとチロルは、何やら思いついたように、花の先にとまりました。花が何か言いかけたその時、女の子が、花の先にとまるチロルに気が付きます。そして、女の子は驚いたような顔をした後、にっこりと笑いました。
花の先にとまるチロルの羽は、まるで花びらのようでした。そう、二枚の花びらです。
きらい……すき。
「あの子にとって、君はもう、『きらい』の花じゃない。『すき』の花だ。」
チロルが、そう言いました。花は、込み上げる思いに、返す言葉もありません。
「君のおかげで、僕は本当に綺麗なものに気付いたんだよ。」
チロルがそう言って、少ししてから、
「ねえ。」
と花が言いました。
「私も、あなたと一緒に綺麗なものが見たい。」
チロルは、その言葉が、花が自分も旅に連れて行ってほしいと言っているのではないと分かりました。「うん。」とうなずき、その小さな羽をひるがえして、チロルは飛び立ちました。悲しくないふりをしました。
チロルはまた、綺麗なものをさがす旅に出かけます。この羽がある限り、そして、心の中で、あの花が咲き続ける限り。
チロルは、綺麗なものを探して旅を続けます。